

2018年度③

小論文

(全 15 ページ)

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙・下書き用紙は、この冊子の中に折り込んであります。
3. 解答はすべて解答用紙に記入下さい。
4. 解答は指定された範囲に記載すること。「書き終わり」をこえて記載した場合は、採点をしないことがあります。
5. 試験終了後、問題冊子・下書き用紙は持ち帰り下さい。

小論文③

課題文を読んで、以下の設問に解答しなさい。

1. 意味の創造者としての「私」

意味を生み出す自由

いま私たちの社会に求められていること、それは「ひとりひとりが自分自身の「生きる意味」の創造者となる」ような社会作りである。

長い間、この日本社会で私たちは「他者の欲求」を生きさせられてきた。他の人が欲しいものをあなたも欲しがりなさい。そして「他者の目」を過剰に意識させられてきた。他の人が望むようなあなたになりなさい。しかし、そうやって自分自身の「生きる意味」を他者に譲り渡すことによって得られてきた、経済成長という利得は既に失われ、私たちは深刻な「生きる意味の病」に陥っている。

そこで彗星のごとく現れ出た「構造改革」は、私たちをがんじがらめの不毛な「生きる意味」から解放する、自由の使者のように登場した。しかし、それは一見自由に見えて「生きる意味」においては私たちに全く自由を与えない。「高い報酬を与えられる」ということ、「高い数字を得る」ということが誰にとっても究極の価値であるという目標が与えられ、その目標を達成するための競争においていままではいろいろな障壁があったのでそれを取り除き、これからは自由に競争できるようにしましょう、という社会は果たして自由な社会であろうか。それは「競争の自由」であって、決して「生きる意味の自由」ではない。それどころか、私たちの「生きる意味」はこれまでよりもいっそう「数字」に縛りつけられることになるのだ。

私たちの抱えている一番の問題、それは私たちが「生きる意味を生み出す自由」を獲得していないということだ。私たちの「生きる意味」は誰かから与えられる。そしてその「生きる意味」に向かつてなるだけ効率的に生きなさいという社会。私がいよいよといまいと、私の「生きる意味」は最初から決まっているように感じられてしまう社会。それは私たちの社会の意味のシステムと私たちひとりひとりの意識が重なり合って生まれている「生きる意味の病」なのである。

そこからの脱出は、私たちひとりひとりが自分自身の生きる意味を創造していける社会への変革である。〈生きる意味を創造するものとしての人間〉という人間像こそ

が、私たちが解放へと導くものなのである。

「社会に生きている人間は誰もが高い報酬を得ることを第一の欲求としている」ということが前提とされている社会の、「生きる意味」におけるあまりの貧しさは、既に繰り返し指摘してきた。仕事のやりがいは報酬の額だけではない。自分の仕事に対する誇り、自分の技量が活かされ、自分ならではの貢献ができることの喜び。仕事を取り結ぶ人間関係の豊かさ。報酬の額という数字ではなく、「仕事自体」の喜びがそこにはある。

あるいは、仕事からの報酬はそこそこのものでいい、家族との時間やオフタイムの趣味が楽しくてしょうがないという人もいるだろう。例えば『釣りバカ日誌』のハマちゃんはどうだつの上がないサラリーマンで、出世街道にも乗りそびれているけれど、しかし彼はとても幸せそうだ。それは彼が彼独自の「生きる意味」に支えられているからで、釣りの世界では社長ともタメ口がきけてしまうような自由さがそこにはある。そしてその「生きる意味」をかわいい奥さんも支えてくれているのだから、本当に果報者である。私はこれまで「21世紀の人間像」といった講演やシンポジウムで、この『釣りバカ日誌』のハマちゃんを「これぞ21世紀社会における一番「強い」人間像だ」と紹介したことが何回もあるのだが、それは彼が「生きる意味」の創造者であり、「生きる意味」の自立を成し遂げているからである。

経済的に自立していても、「生きる意味」において自立していなければ、私たちはこの社会システムの奴隷となってしまう。学校の成績が良くても、本当に自分のやりたいことが分かっていなければ、私たちは単なる「いい子」だ。そこから本当に自分自身が「意味の創造者」となれるかどうか問われているのである。

誰の「ライフ」なのか

私たちはこれまで常に「誰かが意味を与えてくれる」ことに慣れてきた。子どものときは親が意味を与えてくれる。学校が意味を与えてくれる。そして就職すれば会社が意味を与えてくれる。そのように社会の側が私たちの「生きる意味」を与えてくれた。しかし、いまやその「与えられる」意味を生きても私たちに幸せは訪れない。

社会が転換期を迎えるときには、評論家とかオピニオンリーダーと呼ばれる人たちが次の時代に目指すべき意味を指し示してくれてきた。そして私たちは「次の時代の潮流に乗り遅れないようにしなければ」と必死だった。しかし誰かが指し示す潮流にただ流されて進んでいくことからは、もはや私たちの生き方は生まれえないのである。

かなり前から「これからはモノの時代ではなく、心の時代だ」と言われるようになった。そして新聞などの世論調査を見ても、「モノより心だ」という意識は顕著に表れてきているし、私もその方向性には共感を覚える。しかし繰り返し「心の時代」が説かれているにもかかわらず、私たちがいっこうに豊かさを感じることはできないのは何故だろう。

それは「心の時代」の「心」が誰の心なのかという出発点に全く意識が払われていないからだ。「心の時代」の「心」が誰の心なのかと言われれば、それは「あなたの心」でしかありえない。「心の時代」とは私たちひとりひとりの心の満足が出発点になる時代のことなのだ。しかし、私たちの多くはこれまでのように「誰かが私たちの心を満足させてくれる方法を教えてくれるだろう」とか「心の時代の上手な生き方を示してくれるだろう」と思ってしまう。

あなたの人生のQOL、クオリティー・オブ・ライフは、あなた自身が自分自身の「生きる意味」をどこに定めるかで決まってくるものだ。評論家やオピニオンリーダーの言うことを鵜呑みにしてしまうのでは、それは既にあなたの人生のQOLではなくなってしまう。この混迷する世の中で、「あなたはこう生きろ！」「こうすれば成功する！」といった書物が溢れている。そして、自信のない私たちはそうした教えに頼ってしまいそうになる。しかし、「おすがり」からは何も生まれない。

「心の時代」とは、私の「心」「感じ方」を尊重しようという時代である。〈これが誰にとっても正しい「心の時代」の過ごし方だ〉などというものはない。自分自身の心に素直になって、自分がいま一番何を求めているのかに従って生きていこう、モノの多さ、地位の高さ、そして「他者の目」からの要求に惑わされず、自分の感じ方を尊重して生きていこうということこそが「心の時代」なのだ。私たちにいま必要なのは、私たち自身の姿を、私たち自身の心を映す鏡なのである。

一点豪華主義

しかし、私は一体何を求めているのだろうか？ 私の満足とはどこにあるのだろうか。いざ「あなた自身が〈生きる意味〉の創造者なのです」と言われても困ってしまう人も多いだろう。

「先生、ぼくが何をやりたいのか、教えてください」という大学生を笑えない状況がそこにはある。周囲からの期待に応え、他人からの評価を高める生き方に過剰適応してしまったが故に、いざ自分の思い通りに生きると言われても、どうしていいのか

分からないのだ。

まず私たちは思う。そんな、自分の思い通りになど生きられるはずがないではないか。お金もないし、才能もないし、名家の生まれでもない。そんな普通の人間がどうやって思い通りに生きられるというのか。そんなの無理だと思ってしまうのだ。

そんなことはない。誰でも自分の人生を創造することができるのだ。あなたはあなたの人生の主人公なのだとは私は断言したい。しかし、ならばどうなったらあなたは満足なのかと問われると、こんどは私たちの欲求は暴走を始める。すべてのことが「最高」なことを思い描くのだ。40代半ばの私は、多くの部下を持つ社長で、とてつもない年収を手に入れ、豪邸に帰れば美人の妻と、お嬢様学校に通うかわいい子どもたちに囲まれ、ときどきは若さに溢れた愛人との密会も楽しみ、週末はヨット、ゴルフ、そして年に何回も海外旅行、誰からも40代に見えないほど若いと言われ、老後の心配もなく、充実した毎日を過ごしている……。

お前はバカか？ と言いたくなるが、「思い通りの人生」と言われたときに、こういった人生を思い描く人は少なくない。まあこの人間が自分の前に立っていたらそれはもはや人間ではなくバケモノだろうが、そうした実際にはありえないバケモノを理想と思い描いてしまうのだ。

その「思い通りの人生」のイメージは、学校の科目ですべて100点を取れば最高だろうといった発想にも似て、もの悲しい。人生にも科目があって「仕事」「年収」「結婚」「子ども」「恋愛」「余暇」「時間」「ルックス」「ファッション」「セックス」……、すべての科目が満点ならば、満点の人生だと思ってしまうのだ。しかし、すべての科目で満点を目指しなさいという発想こそが、私たちを自分自身の「生きる意味」から遠ざけてしまったものだったはずだ。問題は「すべての分野で」ではなくて、「どの分野で」自分は大きな満足を感じるのか、なのだ。

しかし世の中はそういったあなたの人生の「全体の見通し」を問うことなく、「各科目」の点数を問いがちだ。例えば毎日通勤電車の中で見ると雑誌の中吊り広告には、科目ごとの点数が気になるような記事ばかりだ。「今年のボーナス、あなたは勝ち組か?」「このメイクでライバルに差をつける」「お受験最前線——真のセレブの目指す学校とは」「これは効く！ ○○エキスの絶倫パワー！」……人生が「各科目」に分断されて問われることで、常に「もっと恵まれている人間がいるのではないか」「自分ももっとがんばらないと」と欲求不満に襲われてしまう。そうして、自分の人生の全体を見通す目を失ってしまいがちになるのだ。

人生の満足度の高い人、それは「一点豪華主義」で生きている人である。この嫁さんと一緒にいさえすれば人生ぜったい満足だという人は強い。ミステリーを読んでさえいれば幸せという人も強い。辛いことがあっても患者さんの笑顔を見れば幸せになるという看護師の人は強い。『釣りバカ』のハマちゃんは強い。

「濃淡」から生じる意味

ハマちゃんはそんなに会社で尊敬を受けているわけでもないし、年収がそんなに高いとも思えない。だから「客観的」な状況や「数字」においては、彼よりももっと高い評価を受けている人はこの世の中にたくさんいる。しかし、ハマちゃんは自分は「釣りバカ」で満たされているので、他のことにはそんなにこだわらない。「一点豪華主義」の人の満足度が高いのは、自分の「生きる意味」の中心で満たされていて、他のところでちょっと評価が低くても「気にならない」からである。

自分の「生きる意味」を生きている人の世界には「濃淡」がある。世界のどこが自分としては譲れない「濃い」部分で、どこがあまり自分には問題にならない「薄い」部分なのかの地図ができています。だから「薄い」部分で何かが起こってもそんなに気にしなくてもいい。「同じ年なのに君の年収はぼくより低いね」と言われても、「うん、まあぼくは家族と一緒にいられる時間を一番大事にしているからね」と涼しい顔で言い返すことができるのだ。

しかし、この社会はそうした人生の中での「濃淡」を奪いがちだ。「国語で100点取ったよ！」と喜ぶ子どもに、「でも算数が60点ね。もっと算数をがんばらないとね」と言い続けるような社会だ。そして「生きる意味」の「濃淡」を均質化してしまうことで、自分のいる場所は他の場所と交換可能になり、世界のどの場所に生きているのかが分からなくなってしまうのだ。

私自身もかつてはそうした「濃淡」を失い、「均質空間」の中で「生きる意味」を見失った若者だった。中学生や高校生のころの試験を思い出す。1時間目が地理の試験で、2時間目が古文。その間の休み時間に友達たちが答え合わせをしている。「世界一長い川ってどこだっけ?」「ミシシッピ川だろう?」「いや、ナイル川だよ」「やべー、オレ信濃川って書きちゃったよー」そういった会話を聞きながら私は「こいつらはほんとバカだ」と心の中で思っていたものだ。「いまごろミシシッピとかナイルとか答え合わせをして、地理の点数が上がるのか? もう試験は終わってるんだぜ。いまやるべきことは、前の時間の答え合わせではなくて、次の時間の古文の暗記だろ

う」。そうやって、友人たちの会話には加わず、黙々と暗記に励んだものだ。

しかし、そうやって何とか大学まで進学したが、そこで私はどうしていいのかわからなくなってしまった。自分が何をやっていいのかわからないのだ。私にとっての地理や古文は、そのこと自体に興味があるのではなく、点数を取るための単なる素材だった。単なる素材にすることで、自分を最大限効率化して、点数を取ることに集中する。自分にとっての「意味」を捨象して、数字という目標に最大限効率化できる人間のほうがテストは得意だ。しかし、そこから先「自分はどうやって生きていくか」という問いの前では全く無力になってしまう。それは私と世界が「愛」で結ばれていないからだ。

「世界」と「私」のきずな

周りを見回してみると、そこには世界を「愛」している人たちも少なからずいた。数学の難問にアタックするのを喜びとしている人。生きるとは何かを求めて難しい哲学書を読みふけている人。源氏物語の甘美な世界に浸りきっている人……。そうか、学問とは点数を取るためのものではなかったんだ。それは世界の中で「愛」する対象とつながることなんだ、そんなことに遅ればせながらようやく気づいたのだ。

世界と「愛」でつながること。それは学問だけではない。自分の時間を「犠牲」にして、障害を持った人と関わるボランティア活動に打ち込んでいる人もいた。しかしその時間は「犠牲」どころか、そのときこそ彼女は光り輝いていた。演劇に取り憑かれて、大学の講義に来なくなる人もいた。しかし、その公演に行くと彼は教室の中ではついぞ見たことがなかった生命力に溢れたオーラを発していたのだ。

世界とは効率性の追求のためにあるのではない。自分が何を愛するのか、世界の何と「愛」でつながることができるのか、そのことを見出さなければぼくはこれから生きていくことはできないんだ。それが、ノイローゼ状態となりカウンセリングに通い始めた私によく訪れた、ひとつの啓示であった。

もっとも、その精神的変調は、幼少時から母ひとり子ひとりで育ってきた状況からいかに母離れするかといった共依存的「愛憎」の問題でもあり、小さいときから何故か「差別はどうやったらなくなるのだろうか」といったことが気になって仕方がなかった私が、政治犯救援の運動などに関わる中で「平和を求める人たち」が互いに暴力をふるい合う様に深く傷ついてしまったことなど、様々な要因が絡まり合っていた。それらが一気に押し寄せ、私の心が処理できる容量をはるかに超えてしまったのだと

思う。しかし、いまから考えれば、それまでのシステムの破綻があったからこそ、私はようやく一歩先に踏み出すことができたのだろう。私にとっての「生きる意味」の創造とは、それを阻むシステムの破綻と崩壊から始まったのである。

2. 「内的成長」の条件

私はこの本においてひとつの新しい言葉を提示しようと思う。

それは「内的成長」という言葉だ。私たちの社会はこれまで、年収や成績といった数字に表されるような指標によって、私たちを外側から見る成長観に支えられてきた。それは「経済成長教」が力を持っていた時代には機能してきた成長観だった。しかし、そうした成長観はもはや私たちの生きることを支えてはいけない。私たちの成長を内側から見る目がいま求められている。そして、私はそれを「内的成長」と呼びたいのだ。

「内的成長」とは何か、それは「生きる意味」の成長である。生まれてから死ぬまで私たちの「生きる意味」は成長し続けていく。私たちの身長はあるところで成長を止める。私たちの収入はあるところまで右肩上がりでそれから下がっていく。しかし、私たちの「生きる意味」はずっと成長を続けていくのだ。

私たちは生きていく中で私たち自身の「生きる意味」を変化させていく。人生地図の濃淡の具合が変わっていくのだ。例えば、小さいときはお母さんが世界の中心で、学校に行きだすと友達が大切になり、その後バンドにはまった青春期が続き、就職したら仕事もものすごく面白くなり、しかし「釣り」と出会ってからはそれがもう一生の友……といったように、私たちはひとりひとり別々の「生きる意味」の遍歴を持っているものだ。そして、その「生きる意味」の歴史は積み重なり、人生経験となって私たちの生きる意味をさらに深めていく。私たちの人生とは、「生きる意味」の成長とともにあるのである。

人生の「創造性」

ところが、私は何の「内的成長」もなかったと自分自身を振り返る人もいる。例えば次のような発言は少なからぬ数の女性から聞いたことがある悩みだ。

「私は結局ずっと人の目を気にして「いい子」をやってきたんだと思います。小さいときは親にとっての「いい子」そのものでした。クラスでもいつも優等生でしたが、

それも先生や友達の前で「いい子」をやっていたのだと思います。それから「いい妻」になり「いい母」になりました。だから周りの人はみんな「よくできた人だね」って言うんですよ、私のこと。でも、このごろ気づいたんです。私って小さいときから成長してないって。いつも周りの人の目を気にして「いい子」をやり続けてきた。もしかしたら子どものままだんじゃないかって」。

彼女は人生でたくさんのことやってきたはずだ。学校では優等生だし、友達にもきっと優しくしたことだろう。絵に描いたような幸せな家庭を築いてきたのかもしれない。しかし、周囲からは幸せそのものと見えていても、本人が悩んでいるということはよくあることだ。私は何か不自由だ。自分自身が自分でないような気がする。そして、その不満に直面し、自分の人生を見つめ直したとき、自分はいろいろなことをやってきたけれども、「生きる意味」においては全く成長していなかったのではないか、常に「人の目を気にするいい子」を生きてきたのではないかと気づく。そしてそこから彼女の人生の転機が始まるのだ。

こんな人もいる。

「ぼくはみんなから見ると、人生の成功者だって思われているんですよ。事業にも成功して、おかげさまで儲かってます。お金にも全然困っていない。でもね、このごろちょっと何か空しくなってきたね。というのも、ぼくの生まれ育った家庭は貧しかったんですよ。それで、お金がないとこんなに情けないんだって、悔しい思いが骨に染みついてしまっていてね、オレはぜったい金持ちになると決めたわけですよ。それからほんとお金のことだけを考えて突っ走ってきましたね。最初は会社に勤めて、それから独立して、いろいろな事業に手を染めました。だから他の人から見ると、波瀾万丈、たいへんな人生経験だっていうわけ。でもね、ぼくの中ではこの20年間考えているのは、常に「どうやったら儲かるか」ってことだけですよ。本人的にはかなり単調な人生なのかもしれないなって。でもこのごろちょっとお金はもういいかって思えましてね。というのも、この前子どもに言われたんですよ。お父さんは全然私たちと一緒にいないって。他のお父さんを見るとうらやましいってね。驚きましたね。うちのオヤジはいつも家にいたんですよ。で、中学生のオレは、何でいつもオヤジは家にいるんだ、そんな暇があるならもっと働いて金稼いでこい、とっていたわけ。オヤジのこと軽蔑していたんですよ。でも、自分の子どもにそう言われて、ちょっとグラツときた。金持ちになりたいっていうのは、オヤジへの反発だったのかなって。で、ずっと軽蔑してきたオヤジが実はまっとうなオヤジだって思えてきて……。いや

あ、いいタイミングで言ってくれるものですよ、子どもっていうのも、それもキツイことをね」。

周りからは成功者だと思われていても、本人的にはあまり面白い人生を生きていないと思っていることはよくある。それは人生に「創造性」がないからだ。小さいときからずっと「いい子」をやり続ける。「どうやったら儲かるか」をやり続ける。そのことに成功し、周囲からは何ひとつ不自由していないと見られても、自分の人生に「内的成長」や「創造性」を欠いてしまっていれば、私たちはどこかで空しさを感じ、「これでいいのか？」と自問してしまうのだ。

人生の「創造性」、それは、私たちが常に新しい「生きる意味」に開かれて生きていることを意味している。私たちが「生きる意味」の創造者であり、人生の節目節目で「生きる意味」の再創造を行うことができること、それが人生の創造性なのだ。

それは「あなたがこの社会で創造性を発揮すれば、その分、あなたに報酬が得られるような、創造的な社会にしましょう」といった、一見「創造的」に見えながら「閉ざされた意味」へと駆り立てていくような、閉じた「創造性」とは違う。小さいときから、最大限効率的に生きることをたたき込み、一生自分が効率的かどうかチェックしながら生きるような社会は、実は創造性を欠き、「内的成長」をもたらさない社会なのだ。

私たちの社会はもはや物質的には十分豊かだ。いま真に求められているのは、生きることの創造性、「内的成長」の豊かさなのである。

「内的成長」のきっかけ

さて、そうした「内的成長」のきっかけとなるものは一体何だろうか。言い換えれば、私たちはどうやって私たちの「生きる意味」に気づくのだろうか。「全科目で100点を取る」といった妄想ではなく、いま私が真に求めているものにどのように出会うのだろうか。

それは私たちひとりひとりが、二つのものへの感性を研ぎすますことから始まる。それは、「ワクワクすること」と「苦悩」の二つである。

「私にとってワクワクすることは何なのだろうか」、その感性が私たちが「生きる意味」へと導くことにはあまり異論はないかもしれない。彼と一緒にいるとワクワクする。新しい技術がいま完成しようとする瞬間にワクワクする。この提案が明日の会議でどんな反響を呼ぶかということを考えるとワクワクする。

それは「情熱」と呼ばれることもある。子どもたちのより良い教育のために情熱を燃やす。世界平和の実現のために情熱を燃やす。「ワクワク」がちょっと浮き立つような幸せ感だとすれば、「情熱」は人生に対するほとばしるようなエネルギーである。ワクワクとか情熱というとちょっと動的なイメージが強いが、感じ方はひとりひとり異なる。もっと「安心」といったイメージの人もいれば、「満ち足りた」といったイメージの人もいる。赤ちゃんをあやしているときが一番満ち足りていて自分らしいひとときなんですよ、といったように。

それは「生きてる！」という感覚でもある。「みんなは何で難民キャンプにボランティアなんかに行くのかって言うんですよ。危険だし、衛生状態だって悪いし。でもあそこに行くと、いま私は最高に「生きてるー！」って感じがするんですよ。忙しいし、疲れるんだけど、でも普段は見えない力がどんどん自分の中から出てくるっていうか……」「森の中を深呼吸しながら歩いているでしょう、ちょっと考え事したりしながら、そういうとき、ああ生きてて良かったってふと思うんですよ」。

「ワクワクすること」「生きてる！」という感覚は、私たちの「生きる意味」の中核にある。それはまさに「生命の輝き」を実感する一瞬であり、私たちが自分自身の「生きる意味」の創造者となる一瞬である。そしてそれは私たちと世界がどのような「愛」でつながっているのかを実感する瞬間でもある。

「ワクワク」の相乗効果

しかし、こうした「ワクワク」感覚は、この日本社会ではあまり正当に評価されてこなかった。例えば、ノーベル賞を取った学者が「新しい発見にワクワクしながら毎日生きているんですよ」と言えば誰からも賞賛の嵐なのだが、私たち一般人が「もう毎日ワクワクしながら生きているんですよ」とか言おうものなら、「お前は苦勞が足りない」とか「そんな脳天気でどうするんだ」と言われてしまうような雰囲気がある。「おい、あいつにもっときつい仕事を回してやれよ」とか上司に言われてしまいそうなのだ。

それは私たちひとりひとりに「抜け駆けは許さないぞ」といった意識があるからだ。「オレがこんなにワクワクすることもなく、毎日つまらなく生きているのに、お前だけワクワクさせるわけにはいかないぞ」といった嫉妬心が、他人の「ワクワク」を素直に喜ぶことを妨害するのだ。他人の「ワクワク」に刺激されて、「さあ、オレも何かいいこと見つけるぞ！」と展開すればいいのだが、ときとして私たちは他者の喜び

を奪うことで自分も安心するという戦略にはまってしまう。「オレも若いころはそうだったよ。でもなあ世間というものは……」とか「そんなことを言っていると、いつかは落ちるよ……」みたいなことを言いたくなってしまうのだ。それは職場の同僚に限らず、親が子どもに対してもそうだし、学校の教師が生徒に対してもそんなふうになってしまうこともある。しかしそうになってしまうと、その場は「みんながみんなでお互いの喜びを殺し合う場」となってしまう。そんな場の何と多いことか。

「ぼくは自分が何にワクワクするのが分からないんです」という人にまず勧めることがある。それは「ワクワクしている人のそばにいなさい」「情熱を持っている人と一緒にいる時間を増やしなさい」ということだ。あなたのワクワクすることとその人のワクワクすることは違う。しかし、ワクワクしている人と触れ合っていると、「ワクワクの極意」が伝わってくるのだ。自分だったらちょっと他の人に何か言われるだけでメゲてしまうのに何でこの人はワクワクしてられるんだとか、何でこんなアホらしいことにワクワクしているのかとか、いろいろと驚かされることはあるが、その「生命の輝き」は必ず伝染してくる。

夢のある人の周りには夢のある人が自然と集まってくる。それはある人の夢を聞いたときに「おおっ、それはすごい！」と、ますますエネルギーを引き出してくれるからだ。そしてそんな場では、ひとりが夢を語ることで他の人の夢を刺激する。それは互いに互いを活性化しあうような相乗的エネルギーの場となっていくのである。

「ワクワクすることを大切にすること」、それは私たちの「内的成長」を促す大きなステップなのである。

「苦悩」こそがチャンス

「内的成長」のもうひとつのきっかけ、それは「苦悩」である。

そう言うと、えっ？ と驚かれるかもしれない。さっき「ワクワクすることを大切にすること」と言ったばかりじゃないか。「ワクワクすること」とは「苦悩しないこと」でしょう？ と言われそう。

しかしそれは違う。苦悩とは現実の自分と「ワクワクする自分」との間のギャップから起こるものだ。こうすれば「ワクワクする」という「生命の輝き」が現実によって抑え込まれている。そこに苦悩が生じるのだ。

だから「苦悩」とは、自分の「ワクワクすること」に気づく大きなチャンスなのである。自分ではまだ自分が何を求めているのかが分からない。何に「ワクワクする」

のかが分からない。自分の「生命力」のありかが分からない。しかし、現実には私は「苦悩」している、という場合、その「苦悩」に向かい合い、その苦悩の意味を探究していくことで、自分が本当に何を求めているのか、どんなことにワクワクするのが逆に分かってくるのである。

もっとも「苦悩」とはそういった「ワクワク」と「現実」の葛藤の極限状態であって、「苦悩」とまではいかない葛藤もある。それは現実への「違和感」という形で現れてくる。「何か違うんじゃないか」といった感覚である。みんなから「いい人」と言われ続けて生きてきた、でも自分がとても自由だとは思えない。何か違うんじゃないか。お金儲けを一心にやってきた。でもこのごろ何か違和感がある。何か違うんじゃないか。そんな感覚である。

そうした違和感や苦悩が、むしろ「生きる意味」を明らかにしていく。それらは私たちの生きている現実に対しての私たちの内部からの「異議申し立て」だからだ。私は本当はそんなことをやりたくない。私はもうそんな生き方にうんざりだ。そうした自分自身の隠れた「声」を聞き届けることこそが、私たちの未来への指針となるのだ。

人生の中で苦悩や違和感があること。それは私たちの「生きる意味の再構築」に必要不可欠である。あるときに「私は生きる意味をつかんだ!」と得心しても、それはときがたつにつれ現実に合わなくなっていくことも多い。「就職して仕事の面白さに目覚めた! 学生時代のようにフラフラ生きるのではなく、仕事に打ち込んで社会的にも大きな貢献をするぞ!」と20代半ばで新たな「生きる意味」に出会って快調に人生を走り続けたとしても、そのまま80歳までいけるとはとても思えない。あるときから「この働き方ではちょっと体が持たない」とか、「子どもからもっと一緒にいたいと言われた」とか、「何で俺にはあいつみたいに趣味がないんだろう」とか、様々な「違和感」が襲ってくる。しかし、その「違和感」はむしろ「生きる意味を創り直すこと」のチャンスなのである。

真の「癒し」のために

世界を「ポジティブ」と「ネガティブ」に二分する考え方が流行っている。そのことからすれば、「ワクワクすること」はポジティブで、「苦悩」や「違和感」はネガティブだ。だから苦悩や違和感をなるべく少なくして、いつもワクワク生きられればそれが一番いい生き方になるということになる。しかし、そんな一生ワクワク生きられるような「天才」はまれだろう。しかし、私たち凡才にも「そろそろ生きる意味を

考え直す時期ですよ」ということを気づかせてくれるために、苦悩や違和感がやってきてくれる。その意味では、苦悩することや現実への違和感を感じることは、私たちの「内的成長」のきっかけになる、人生へのメッセージなのだ。

「いやあ、このごろは悩みが襲ってくると、あっ、また人生の転機が訪れるんだなとワクワクするんですよ」と言う人がいるが、そういう人が人生の「達人」なのだろう。

私は「癒し」という言葉を早い時期から率先して使い続けてきたので、一部では「癒しの元祖」などと呼ばれ、「癒しブーム」の火付け人などとも呼ばれることもある。だから、この本の中で「癒し」という言葉をこれまで全く使っていないことを不思議だと思う人もいるかもしれない。それは現在の「癒しブーム」が非常に底の浅いものとなってしまう、私たちがもともと主張したかった「癒し」とはかけ離れたものになってしまったため、「癒し」という言葉を使うとむしろ「生きる意味の再構築」どころか「生きる意味の墮落」のように受け取られてしまうことを懸念してのことである。ブームの中での癒しは常に「癒されたい」と受け身であり、自分で自分の人生を切りひらいていく、創造していくという意識は希薄だ。そして、「苦しいこと」はなるだけお手軽に除去してしまえばいい、「苦悩」などない人生が癒された人生だと、浅薄な人生観がまかり通っている。

しかし、私は苦悩すべきときに苦悩することがむしろ真の癒しにつながると思っているのだ。自分の生きる現実と自分の中の「生命の輝き」の方向性が食い違ってしまったとき、そういった病に陥るべきときに「ちゃんと」病になること、それがむしろ癒しをもたらす。「悩み」や「病」は自分の人生に対する警告信号である。「悩み」や「病」を単なるネガティブなものだとしてすぐに除去してしまおうという姿勢からは、「生きる意味の再構築」も「内的成長」も生まれえない。私たちは自分自身を「癒す」力を持っている。そしてその「癒す」力とは、病むべきときに「病む」ことができる能力、「病」に気づく能力を含んでいる。「病」への、現実への「違和感」への感受性を持っているからこそ、癒しや成長が可能になるのである。

苦悩を支え合う

「内的成長」それは、私たちの「生きる意味の成長」である。そして「ワクワクすること」や「苦悩」、「違和感」への感性が、そのきっかけとなる。「内的成長」は私たちの感性、感受性の成長でもあるのだ。

しかし、その「きっかけ」が「内的成長」へとつながっていくかどうかには、もうひとつの重要な要素がある。それは「コミュニケーション」である。

「ワクワクすること」を育てていけるかどうかには、どんな人と付き合っているかが大切だということは先ほど述べた。自分のワクワクする話を語っても「お前はしょせん苦勞が足りないんだよ」と言われ、夢を語っても、「そんなのどうせ無理だよ」と言われ続けるのでは、人生の輝きからも夢からも見放されてしまう。もちろん、真の友人、先輩として、「ここがまだ足りない」とか「もっとこうしたところを努力すればいい」とか、心からのアドバイスを送ることがキツイ言葉になることはある。しかしそれは友人や後輩の「夢」や「輝き」を尊重すればこそそのことであって、自分も不満だらけで生きているのだから、お前もそうでなければダメだというように、妬みから潰しにかかるような人間たちに囲まれているのでは、かなりの生命力を持っていないければ、その場での「内的成長」はなかなか難しいだろう。

「苦悩」に直面し、その意味を深く探究することから自分の「生きる意味」を探し出すこと、それもなかなかひとりではできないことだ。苦悩するとき、私たちはとても孤独だ。誰も自分の苦悩を分かってくれない、自分は見捨てられている、そんな思いにとられることも多い。

もちろん、そういった孤独は大切ではある。ちょっと苦しいだけで「癒して～」と誰かに依存してはなかなか苦しみの深い意味とは直面できない。私にしても、苦しいときに誰にも会う気にならず、誰にも自分の心を打ち明けることができず、閉じこもりのように引きこもっていたこともあったし、その時期も自分にとっては大切だったのだと思う。しかし、そこから劇的に「生きる意味」が展開していったのは、孤独の極点でもう耐えられなくなり、友人たちに自分の胸の内を吐露し始めてからのことだった。

「苦悩」を探究すること、それにはかなりのエネルギーが必要だ。そして、それは一朝一夕には成し遂げられない。「苦悩」に向かい合い、それを「内的成長」へとつなげていくには、かなりの時間も必要なのだ。そして、そこを耐え抜き、「生きる意味」へと展開していくには、仲間が、そして仲間とのコミュニケーションが必要なのである。

コミュニケーションがひらく可能性

私たちの多くは、人生に「苦悩」があることが問題なのだと思う。だから

「苦悩」が起こらないようにとびくびくしながら生きている。しかし、問題なのは「苦悩」が生じるかどうかよりも、その「苦悩」が孤立化してしまうかどうかだ。もしあなたに「苦しみ」が生じて、もしその「苦しみ」を聞き届けてくれる仲間が、友人がいれば、もちろん苦しいことは苦しいにしても、あなたの「苦しみ」はそこで受けとめられ、新たな「生きる意味」へと展開していく。そして、一番苦しい時期を何とか耐え抜き、その「苦しみ」を「内的成長」へと育てていくときへとつなげていくことができるのである。

前章で、私は「数字信仰」が私たちからコミュニケーションを奪ってしまうことを指摘した。あるものの意味が、数字という一見客観的な指標で、曖昧さもなく決まってしまうえば、私たちがお互いに意味を求めてコミュニケーションする必要はなくなってしまう。数字による意味づけは瞬時に決まるから効率的だ。しかし「生きる意味」は瞬時には決まらない。「生きる意味」を求めて、時間をかけながら、意味を探り出していき、意味を熟成させていき、そんなコミュニケーションは効率的ではないが、しかしそこにこそ生きることの豊かさがあるのだ。

人がワクワクすることをともに喜び、人が苦悩することをともに受けとめる。私たちの「内的成長」は、他者に支えられることから大きなエネルギーを得る。「内的成長」を支えるのは、まさにそうした「豊かな」コミュニケーションなのである。とすれば、私たちがいまこそ取り組むべきは、豊かなコミュニケーションを可能にする社会作りである。「内的成長」をもたらす新しいコミュニティの創造、それが私たちの課題となるのである。

出典：上田紀行「生きる意味」（岩波新書 2005 年）

（出題にあたって、一部、原文・図を省略したり、年代の数字の表記をあらためた箇所がある。）

設問Ⅰ 『「生きる意味」の自立』とはどのような状態をいうのだろうか、筆者が文中で挙げている例にふれながら、500 字以内で説明しなさい。(100 点)

設問Ⅱ 筆者が課題文で新しい言葉として提示した「内的成長」とは何か、また、この「内的成長」を実現するために必要な諸条件とは何か、1500 字以内で説明しなさい。(200 点)